

学校課題研究授業② 7月1日（平成25年度）

学校課題

自分の言葉で考え、伝え合える児童の育成

—基礎的な力をもとに、思考を広げ表現できるようにする取組—

本校では、上記のような学校課題を設定し、研究に取り組んでいます。

本年度は、言語力の基礎となる語彙力を育成し、さらに思考力・表現力を豊かにしていきたいと考えています。そこで、伝え合う力を「共感的な人間関係を土台に、豊かな語彙をもち、適切な言葉を選んで自分の考えを広げたり深めたりする力」ととらえ、言語力の向上をめざして研究を進めていきます。

今回は、S&Uコラボ事業（下野市と宇都宮大学教育学部の連携）による授業研究会です。

宇都宮大学教育学部附属小学校の山中勇夫先生をお迎えし、本校の6年生で提案授業（出前授業）を行っていただき、参観しました。その後、ワークショップで「話す・聞く力」の基礎を身に付けるための活動の実際について体験しながら教えていただきました。

出前授業では、ウォーミングアップの漢字フラッシュカード、授業の何箇所かに配置された「書く」「話し合う」「発表する」などの言語活動、文学作品を読み深める手段としての「対比」を扱う有効性、明確な評価とそれを支援や次の活動に効果的につなげる術などが大変参考になりました。

ワークショップは、「子どもがよりよく話す・聞く5つの実践」というテーマで、以下のようなことを教えていただきました。

前提として「話せる」とは

ソフトとして話す「内容」があること、ハードとして「声が出る」（+目線・身振り手振り・表情・抑揚）ということ。

①声を出す機会の確保

読解とは別に、音読のバリエーションを増やして身体的に声を出す経験を多く積めるようにする。（追い読み、一文交代読み、たけのこ読み、巻き込み読み・・・さらに多くのバリエーションで緊張感をもって）

実施するときは付けたい力を3つ程度に焦点化して、明確な評定を行う。

②聞き方名人

モデリング（例を見せる）、リハーサル（実際にやってみる、練習する）、フィードバック（聞いている姿を具体的にほめて評価する）、話す・聞く活動で実践させて定着化を図る。

③明確な評定

話す・聞く活動で、視点やねらいを焦点化して、教師からの明確な評価を与えることを定期的に繰り返していく。

④型を示す

例えば、4年生以上なら「結論→理由→反論予想→反論へ→再結論」といった型を示し、発表



やスピーチ，ペアでの話す・聞く練習などで扱う。

1年生では，「好きな物は～です。質問はありますか。」ぐらいでも。

⑤変化のある繰り返し

発表の練習などで，ペアを変え，明確な評定を出し合い，何度も何度もやらせる。

繰り返して出てきた原則が，「話す力を細分化」→「付けたい力を焦点化」→「易から難へのステップで」→「変化のある繰り返し」→「明確な評定」でした。

今回学ばせていただいたことを，日常的な実践や今後の研究授業で生かしていきたいと思います。